

事例7 小学校社会科の内容との関連を意識した授業展開の事例

○学年 第1学年

○主な領域 (歴史的分野) B 近世までの日本とアジア (1)古代までの日本

○事例のポイント

- ①小学校で学習した偉人の実績や歴史上の出来事をもとに学習課題を設定し、問題解決的な学習を取り入れながら歴史的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察し、課題を追究できるようにする。
- ②小学校で多く取り入れられている活動型・体験型の学習方法を取り入れ、歴史的な見方・考え方を働かせ、深い学びを追究する。
- ③知識構成型ジグソー法を取り入れることで協調学習を実現し、自分の考えを深め、思考力、判断力、表現力、問題解決能力等を育成する。

ICTを活用した主な学習場面

- ・生徒の考え(グループの考え)を共有する場面
- ・自らの学びの軌跡を振り返る場面

ICT活用の利点

- ①「小学校の学びシート」を活用することで既習事項を確認できるようになるとともに、小学校での学習内容の繰り返しにならないようにすることができる。また、共同編集ソフト(スクールタクト等)を活用することで、中学校の学習内容を「小学校の学びシート」に追加しやすくなり知識の蓄積ができるようになる。
- ②一人では十分な答えが出ない課題について、プレゼンテーションソフト(Google スライド等)を活用することで自他の考えの違いに触れることができるようになり、より良い解に到達することができる。
- ③学習シートを文書作成ソフト(Google ドキュメント等)で作成することで、自らの学びを調整しながら学習をすすめることができるようになり、教師や他の生徒による評価につなげる。

1 小単元名 「古代国家の歩みと東アジア世界」(10時間)

2 小単元について(略)

3 小単元の目標と評価規準

(1) 目標

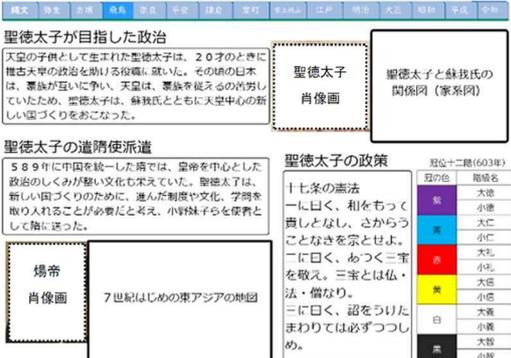
- ・聖徳太子らの政治や大化の改新によって、中央集権国家の政治へ転換したことや、東アジアの制度を積極的に取り入れながら整えた律令国家の仕組みを理解する。
- ・東アジアとの交流と政治や文化の変化に着目して事象を相互に関連付け、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。
- ・古代の政治の変化、古代の文化と東アジアとの関わりから、どのように律令国家が成立したのかについて、そこで見られる課題を主体的に追究しようとする態度を養う。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・聖徳太子らの政治や大化の改新によって、中央集権国家の政治へ転換したことや、東アジアの制度を積極的に取り入れながら整えた律令国家の仕組みを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東アジアとの交流と政治や文化の変化に着目して事象を相互に関連付け、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古代の政治の変化、古代の文化と東アジアとの関わりから、どのように律令国家が成立したのかについて、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

4 小単元の指導計画・評価計画（10時間）

●「学習改善につなげる評価」 ○「評定に用いる評価」

時	学習活動等	評価の観点			評価規準（評価方法）
		知	思	態	
第1時	<p>● 小学校の学習内容をまとめた「小学校の学びシート」と中学校の教科書を比較する。その際、東アジア（特に中国）との関係が深いことに気付かせた後、「学習シート」に単元を貫く問いに対する予想を立てる。</p> <p>編 P 50 指導計画作成の留意事項(1)</p> <p>「小学校の学びシート」</p>  <p>ICT活用の利点① 共同編集ソフト（スクールタクト等）を利用して小学校の既習事項を確認し、単元全体の学習の見通しを立てられるようにする。</p> <p>● 小学校の既習内容を理解している。（小学校の学びシート）</p> <p>● 学習の見通しを立てて、学習を通して明らかにしようとしている。（学習シート）</p> <p>ICT活用の利点③ 文書作成ソフト（Google ドキュメント等）を利用した小単元全体を振り返ることができるシートを作成し、自らの学習の過程を捉え、自らの学習を調整することができるようにする。</p>				
	<p>単元を貫く問い 古代の日本はどのような特徴をもった国になっていったのだろうか</p>				
第2時	<p>課題 聖徳太子は、どのような政治を目指したのだろうか</p> <p>● 聖徳太子が、天皇中心の政治を目指した理由と中国から学んだ理由を、「小学校の学びシート」から理解する。</p> <p>編 P 50 指導計画作成の留意事項(1)</p> <p>● 聖徳太子は、古墳時代までの政治の仕組みについてどのような点を変えたのか、諸資料から読み取り、聖徳太子の政治の特徴をつかむ。</p> <p>ICT活用の利点① 学習シートを活用し、本時の課題を振り返る。その際、「小学校の学びシート」を活用し、聖徳太子の政治について、東アジアの動きが国づくりに影響を与えたことを捉えられるようにする。</p>				<p>事例のポイント① 聖徳太子の政治については、中学校の教科書とほぼ同じ内容を学習している。そのため、小学校の起源、変化、継承などを問う視点からの学習を生かし、聖徳太子の政治について、推移、差異、背景、因果関係といった見方・考え方を働かせ、どのような流れで古代国家が成立したのかについて、多面的・多角的に考察していく。</p> <p>○ 聖徳太子の政治について、身分制度、法制度、東アジアとの関係から、<u>聖徳太子の政治の特徴を考察</u>している。（学習シート）</p>

<p>第3時</p>	<p>課題 大化の改新は、どのような改革であったのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> 蘇我氏の滅亡前後の政治の変化と東アジアの変化から大化の改新について追究し、<u>どのような国家となっていくのかについて考察する。</u> <p>事例のポイント② 中大兄皇子、中臣鎌足、蘇我入鹿の立場になって、東アジアの変化をもとに国内の政治の行く末について議論を行う。</p>	<p>●</p>	<p>●蘇我氏の政治と改新の詔との比較から、<u>大化の改新の意義について考察している。</u>(学習シート)</p>
<p>第4時</p>	<p>課題 聖武天皇は、どのような国づくりを目指したのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> 聖武天皇の大仏づくりから、聖武天皇が目指した国づくりを理解するとともに、奈良時代の特徴をつかむ。 <p>編P50 指導計画作成の留意事項(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習シートを活用し、小単元課題解決のための見通しを立てる。 	<p>●</p>	<p>●<u>単元導入時に立てた予想と本時の学習を比較し、次回の学習の見通しを立てる。</u>(学習シート)</p>
<p>第5時</p>	<p>課題 奈良時代の人々は、どのような生活を送っていたのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> 都と地方の政治のしくみが整えられたことによりどのような国になったのか、<u>民衆の立場から時代の特徴をつかむ。</u> <p>事例のポイント② 貴族、国司、民衆の立場になってロールプレイを行い、税制度を含めた土地制度について奈良時代の特徴をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 中国にならった国づくりの理由を解明し、日本独自の中央集権国家がどのようなものであるのかについて、本時の学習から追究する。 	<p>●</p>	<p>●時代の変化から、日本の中央集権国家の特徴を理解している。(学習シート)</p> <p>○ ○<u>単元導入時に立てた予想と本時の学習を比較し、学習改善のヒントを得る。</u>(学習シート)</p>

編P50 指導計画作成の留意事項(2)(6)

ICT活用の利点②

グループごとの考えを、プレゼンテーションソフト (Google スライド等) を利用して共有し、様々な考えから自分なりの解を見つけていけるようにする。

事例のポイント①

小学校で行っている大仏のパーツを作るなどの体験的な学習や、大仏造営を命じた聖武天皇の願いを考察する授業をもとに、本時の学習課題の設定につなげる。

ICT活用の利点③

学習シートを活用することで、第4時までの学習を振り返りながら自分の考えを調整し、単元を貫く問いの解決のための見通しを立てやすくする。また、小単元当初の「予想」と比較しながら自らの学習を調整する機会となるようにする。

編P50 指導計画作成の留意事項(2)(6)

ICT活用の利点③

学習シートを活用し、小単元当初の「予想」と比較しながら自らの学習を調整する機会となるようにする。

第6時

課題 飛鳥文化と天平文化は、それぞれどのような特徴があるのだろうか

・小学校の学びシートを活用して飛鳥文化と天平文化を比較し、共通点や相違点を見つけることで文化の特徴をつかむ。

●

●2つの文化を比較することで、東アジアからの影響を大きく受けていることや時代の特徴を理解している。(学習シート)

ICT活用の利点②

資料をグルーピングすることで、東アジアからの影響を受けていることに気付かせ、文化の特徴をつかむ。

編P50 指導計画作成の留意事項(1)

第7時

課題 桓武天皇は、どのような政治を行ったのだろうか

・桓武天皇の遷都、蝦夷討伐などについての資料を活用し考察する。

●

●桓武天皇の政治の特徴について、多面的・多角的に考察し表現している。(学習シート)

・天皇中心の政治から、貴族の政治へと転換していく変化の様子について、系図から考察する。

編P50 指導計画作成の留意事項(2)(6)

ICT活用の利点③

学習シートを活用し、本時の課題を振り返る。その際、飛鳥時代や奈良時代と比較することで、桓武天皇政治の特徴を捉えることができるようにする。

第8時 (本時)

課題 藤原氏は、なぜ絶大な権力を握ることができたのだろうか

・ジグソー法を用いながら、藤原氏の政治の特徴をつかみ、権力を握ることができた理由を諸資料から読み取る。

事例のポイント①

小学校で学習した「もち月の歌」をもとに、本時の学習課題の設定につなげる。

事例のポイント③

歴史上の人物の立場になって考える学習活動を更に深めるため、多面的・多角的に考察することができるジグソー法を活用する。その際、「小学校の学びシート」を活用することで、既習内容をもとに考察できるようにする。

○

○藤原氏の政治の特徴を理解している。(学習シート)

ICT活用の利点③

「小学校の学びシート」を活用することで、藤原氏の政治の特徴の理解を更に深めることができるようにする。

○

○藤原氏が権力を独占することができた理由を、資料を活用しながら考察し適切に表現している。(スクールタクト)

「小学校の学びシート」

藤原道長 肖像画

○ライバルを追い落とすとした
藤原道長は、兄たちが病気で亡くなり、ライバルを没落らせて権力を握った。

○全国の土地をおさえた
力のある貴族の土地には税がかからなかったから、全国の豪族などが土地を寄付してきた。

○娘を天皇の妃にした
娘を天皇のきさきにして、娘が産んだ孫が次の天皇になれば、自分の思い通りに政治ができると思った。

此世乎は、我世と所思、望月力、虧たる事も、無と思へハ

寝殿通りの御名

天皇にわたり政治を行うようになった貴族の中でも、中孫鎌足の子孫である藤原氏が大きな力をふるった。藤原氏は、摂政や関白という朝廷での地位役職を独占し政治を行い、道長とその長男の頼朝のときに全国をわが家た。

編P50 指導計画作成の留意事項(1)

ICT活用の利点②

他の人の考えに触れることができるようにするために共同編集ソフト(スクールタクト等)を活用し、自分なりの解を見つけていけるようにする。

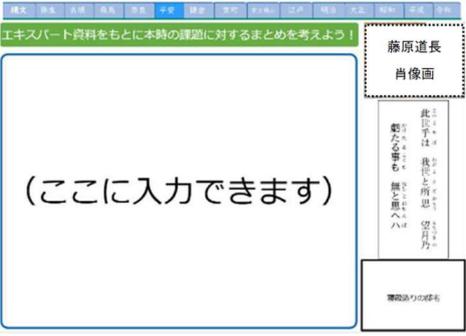
第9時	<p>課題 平安時代の文化は、どのような特徴をもった文化だったのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> 国風文化の紹介シートを共同編集ソフト（スクールタクト等）で作成し、プレゼン形式で発表することで、国風文化の特徴をつかむ。 <p>● 国風文化が成立した背景を理解し、どのような文化が生まれたのかについて考察し表現することができる。（スクールタクト）</p> <p>● 国風文化が成立した背景を理解し、どのような文化が生まれたのかについて考察し表現することができる。（スクールタクト）</p>	●	●
	<p>ICT活用の利点② 共同編集ソフト（スクールタクト等）を活用することで、紹介シート全体を見られるようになるため、多くの情報を適切に収集することができるようにする。</p>		
第10時	<ul style="list-style-type: none"> 「小学校の学びシート」を活用しながら「学習シート」を完成させ、単元を貫く問いの解を入力する。 <p>○ 古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。（学習シート）</p>	○	○
	<p>ICT活用の利点① 「小学校の学びシート」を活用することで、中学校の学習で深めることができた内容を確認することができるようにする。</p>		
	<p>ICT活用の利点③ 学習シートを活用することで、古代の日本を大観して時代の特色を多面的・多角的に考察できるようにする。</p>		
	<p>ICT活用の利点③ 小単元の初めの予想とまとめを比較し、その違いや深まりを自己分析できるようにする。また、次の単元で大切になると考えられるキーワードを、自分なりの視点をもって記述することで、継続的な学びのサイクルを作れるようにする。</p> <p>○ 本単元で学習した内容を、「小学校の学びシート」を活用しながらもう一度振り返るとともに、本単元で学習したキーワードから、次の単元でも重要になりそうなキーワードを選び、その理由を考えさせることで、次の学習へのつながりを見いだそうとしている。（学習シート）</p>		○
	<p>単元を貫く問いの解（例） 古代の日本は、東アジアとの関係を深めながら発展していった。特に文明が発達していた中国にならって法や都を整備し国づくりを行った。その結果、日本独自の律令国家が形成され、天皇を頂点とする中央集権国家が成立した。また、中国や朝鮮半島、西アジアやインドなどの影響を受けた文化が栄えていった。 平安時代になると、貴族が政治の中心となり、藤原氏が絶大な権力を握り、摂関政治が行われた。唐の影響が少なくなると、日本独自の仮名文字が発明され様々な文学作品が書かれるようになった。</p>		

5 本時の学習指導（8／10時間）

(1) 目標

- 藤原氏が絶大な権力を握ることができた理由を理解する。
- 藤原氏の政治の特徴を、資料を活用しながら考察し適切に表現する。

(2) 展開

学習活動等	・指導上の留意点	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">観点</div> 具体の評価規準
1 単元を貫く問いについて確認する。 2 <u>藤原氏の政治について確認する。</u>	事例のポイント① 「小学校の学びシート」を活用し、藤原氏が絶大な勢力をもっていたことを確認する。 ・小学校の学習をもとに本時の課題につなげる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 課題 藤原氏は、なぜ絶大な権力を握ることができたのだろうか </div>		
3 学習課題について考える (1) エキスパート活動を行う。 ・ A：天皇家との外戚関係 ・ B：他氏排斥と摂政と関白就任の流れ ・ C：土地や官位の占有 (2) ジグソー活動を行う。  (3) クロストークを行う。 4 まとめ	・資料の内容や意味をまずは個人で読み取り、その後グループで話し合い、担当する資料に対する理解を深める。 ・資料の読み取りが不十分なグループに対しては、資料の読み取り方を支援したり、教科書を参考にしたりして、資料の読み取りを支援する。 ・課題解決のために複数の資料から判断させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> ICT活用の利点② 共同編集ソフト（スクールタクト等）のグループ課題を活用し、多様な考えに触れることができるようにする。 </div> ・クロストークを通して他のグループとの違いなどに気付かせ、課題に対する理解を深めていく。 ・各資料をもとに、課題に正対するようにまとめさせる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">知・技</div> エキスパート資料を基に、藤原氏の政治権力の増大の理由を理解している。（ワークシート）
まとめ（例） 藤原氏は朝廷の中での権力を高めていく中で、自分の娘を天皇の妃にし、生まれた子供を次の天皇にすることで外祖父として天皇家との関係をさらに深めていった。そして、天皇が幼いときは摂政、成人したあとは関白として天皇の政治を補佐する中で実権を握っていった。そのような中で藤原氏は反対する一族を没落させていき権力を確実なものにした。また、高い官位を独占したり、多くの荘園をおさえたりしていき、絶大な権力を握っていった。		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">思・判・表</div> 藤原氏の政治の特徴を考察し表現している。（共同編集ソフト）
5 本時の活動を振り返り次時への見通しをもつ。	・政治形態や土地制度について、今後の歴史と現代との繋がりを確認する。	

6 板書計画または板書の写真

縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成	令和	授業の流れ <input type="radio"/> 個人作業 <input type="radio"/> グループ活動 <input type="radio"/> 課題解決
単元を貫く問い		古代の日本はどのような特徴をもった国になっていったのだろうか															
本時の課題		藤原氏は、なぜ絶大な権力を握ることができたのだろうか															

藤原氏の権力	A	B	C	<ul style="list-style-type: none"> ・天皇の外戚として権力を握る ・他の貴族の勢力を抑えた ・摂政、関白などの高い官位を独占した ・役人としての収入が多かった ・多くの土地を治めていた
--------	---	---	---	--

7 事例のポイントと考察

(1) 事例のポイントについて

- ① 小学校で学習した偉人の実績や歴史上の出来事をもとに学習課題を設定し、問題解決的な学習を取り入れながら歴史的な見方・考え方を働かせ多面的・多角的に考察し、課題を追究できるようにする。

中学校学習指導要領解説では、「中学校歴史的分野の学習の導入として、小学校で学習した人物や文化財、歴史上の出来事などから適切なものを取り上げ、これと時代区分との関わりなどについて考察し表現する学習を、適切な学習課題に基づいて生徒自身が資料から情報を読み取ったり年表などにまとめたりするなどの活動を取り入れながら行う」となっている。

小学校では、多くの場合、歴史上の人物の実績や歴史上の出来事をもとに学習問題を設定し、調べる活動を通して学習問題を解決している。例えば、「天皇中心の国づくり」の学習問題は、「聖徳太子が目指した天皇中心の国づくりは、だれが、どのように受けついでいったのでしょうか。」のようになっている。この単元では、聖徳太子の政治や、それを受け継いだ中大兄皇子の功績などを調べる活動を行う。また大仏をつくる学習では、顔のパーツの大きさを調べて画用紙で実際に作成する体験的な活動を行う。このように小学校では、活動型や体験型の学習を行っているとともに、中学校の歴史学習に必要な基礎的な知識を既に学習している。

そこで本単元では、小学校の教科書や資料集にある内容を「小学校の学びシート」として教員があらかじめ作成しておき、小単元の導入で知識を確認することとした。授業では、小学校で学習した内容と比較したり関連付けたりすることができる資料を精選することで、多面的・多角的に考察し課題を追究することができるようにしていく。このようにして、小学校で学習した内容を基にした授業を展開することで、時代を大観して特色を捉え、歴史的事象の因果関係を理解するなど歴史学習の学び方を身に付けさせていく。

- ② 小学校で多く取り入れられている活動型・体験型の学習方法を取り入れ、歴史的な見方・考え方を働かせ深い学びを追究する。

小学校では、偉人の功績や歴史的事象から課題をつかみ、調べ、まとめるという活動を行っているため、その学習方法を更に発展させることで、歴史的な見方・考え方を働かせ、深い学びを追究することができる考えた。

第3時の「大化の改新は、どのような改革であったのだろうか」については、大和政権の法制度、十七条の憲法、蘇我氏の政治の3つを比較するとともに、東アジア情勢の変化に関連付けながら、大化の改新についてグループで議論させた。また終末では、大化の改新の後に日本がどのような国家になるのかを予想する活動をグループで取り入れることで、第4時の学習へのつながりも意識できるようにした。

第4時の終末では、どのように大仏建立の資金を調達したのかという疑問をもたせ、民衆の負担によって大仏建立が完了したことを考察した。小学校で学習した大仏建立は聖武天皇の立場から考察したが、民衆の立場から考察することで、第5時の「奈良時代の人々は、どのような生活を送っていたのだろうか」について時代の特徴をつかませるようにした。

第8時の「藤原氏は、なぜ絶大な権力を握ることができたのだろうか」について、小学校

学習指導要領解説では、「(2) (ウ) 貴族の生活や文化を手掛かりに、日本風の文化が生まれたことを理解すること。」となっている。また、「知識及び技能」に関わる事項では、「貴族の生活や文化については、貴族の屋敷の様子や藤原道長に代表される貴族の生活の様子、紫式部や清少納言が我が国独自のかな文字を使って優れた文学作品をつくり出したこと、貴族の生活の様子を描いた大和絵などがつくられたことなどが分かること。これらのことを手掛かりに、京都に都が置かれた頃、日本風の文化が生まれたことを理解できるようにする。」となっている。「思考力、判断力、表現力等」に関わる事項では、「社会的事象の見方・考え方を働かせ、例えば、貴族はどのような生活をしていたか、どのような作品を残したかなどの問いを設けて、この頃の貴族の服装や建物、日常の生活や行事などの様子や紫式部や清少納言の作品について調べ、これらの事象を関連付けたり総合したりして、この頃の文化の特色を考え、文章で記述したり説明したりすることが考えられる。」となっている。

ここから分かるように、小学校では、藤原氏が権力を握ったことは学習しているが、その理由や政治の仕組みについては学習していない。そのため、小学校の教科書にも出てくる「もち月の歌」を活用して学習課題にせまることとし、本時の展開を考えた。

小中の系統的な接続を行うためには、連続性・系統性に配慮し授業をすすめることが必要不可欠である。小学校の教科書に目を通してみると、資料も含めて、中学校の教科書と類似する内容が多数掲載されているため、講義型の授業では、単なる小学校での学習内容の繰り返しになってしまう。そのため、小学校で多く取り入れられている活動型・体験型の学習に、多面的・多角的に考察できるような資料を精選して活用することが、生徒の歴史学習に対する興味を引き出すことができると考えた。

今回の事例では、歴史上の出来事を単なる事実の暗記になることがないようにし、歴史の因果関係や歴史の流れを捉えることができるようにするために、以下のような授業構成とした。

小学校では、「聖徳太子の国づくり」「大化の改新と天皇つながり」「仏教の力で国を治める(聖武天皇の政治)」の順番で学習しているため、第2時、第3時、第4時に同じ順番で学習し、歴史の因果関係や歴史の流れを捉えることができるようにし、その後に民衆の生活や文化の特徴を学習するようにした。このように指導内容を再編することで、古代の日本を大きく捉えることができるようになり、小中の系統的な接続につながっていくと考えた。

③ 知識構成型ジグソー法を取り入れることで協調学習を実現し、自分の考えを深め、思考力、判断力、表現力、問題解決能力等を育成する。

本時の授業では、学習内容を更に深めるためにジグソー法を取り入れた。天皇家との外戚関係(資料A)という一面的な理由だけにならないようにするために、他氏の排斥や摂政と関白への就任(資料B)、土地や官位の占有(資料C)などについてのエキスパート資料を作成し、多面的・多角的に考察しながら、課題を追究する活動を行った。

資料A

A 藤原氏の系図から考えてみよう!

<p>藤原氏と天皇家との関係図(家系図) 藤原鎌足～藤原冬嗣まで</p>	<p>藤原氏と天皇家との関係図(家系図) 藤原冬嗣～藤原道長まで</p>
--	--

不比等の息子の代(房前など)になると、貴族や僧の権力争いが激しく(前時の授業)なったため、藤原家と関係の浅かった光に天皇が即位し、天皇中心の政治を始めた。そして、その跡を継いだ息子の桓武天皇が様々な改革を行った。

資料B

B 平安時代の流れから考えてみよう!

794年	山城(現在の京都)に都が移される。(平安京)	}	①
810年	藤原冬嗣が天皇の ※ ¹ 側近となる。		
842年	藤原良房が、伴(天祥)氏、橘 ¹ 氏の中心人物を ※ ² 流罪にする。	}	②
858年	藤原良房が清和天皇の外祖父(天皇の幼少期に養育する)として権力を握る。		
866年	伴(大伴)氏、紀 ¹ 氏の中心人物を流罪にし、伴氏、紀氏、橘氏が ※ ³ 没落する。 → 良房が摂政(天皇が幼少、または女性の場合に政治を輔佐)となる。		
884年	藤原基経が元孝天皇を ※ ⁴ 即位させ、関白の立場になる。	}	
887年	宇多天皇から、関白(天皇が成人しても政治を輔佐)の詔(天皇の命令)を得る。		
901年	藤原道真が天皇の側近となるが、時平が ※ ⁵ 策略を用い ※ ⁶ 大宰府に ※ ⁷ 左遷する。 → 濃慮の停止(894年)を表現するなど、政府内での実績があった人物		
930年	藤原忠平が朱雀天皇の摂政となる。		
941年	藤原忠平が朱雀天皇の関白となる。	}	
969年	藤原氏が醍醐天皇の皇子を ※ ⁸ 失脚させる。		

※¹ 側近: 貴人や権力者などのそば近くで仕える人 ※² 流罪: 罪人を遠い辺境の地や島に追放すること
 ※³ 没落: 栄えていたものが衰え滅びること ※⁴ 即位: 天皇が皇位を継ぐこと
 ※⁵ 策略: 相手をおとしめられるはかりごと ※⁶ 大宰府: 九州を治める役所
 ※⁷ 左遷: 低い官職、地位に落とすこと ※⁸ 失脚: 物事に失敗し、地位を失うこと

資料C

C 藤原氏の収入から考えてみよう！

役人の収入 (位階の給料)	52084 文	1億3644万円	貴族	宅地面積 6万7000㎡	正一位	【藤原氏の官位】 不比等:正二位 武智麻呂(不比等の子):正一位 房前(不比等の子):正三位 宇合(不比等の子):正三位 麻呂(不比等の子):正三位 冬嗣:正二位 良房:従一位 基経:従一位 忠平:従一位 兼家:従一位 道長:従一位 頼通:従一位 ※正一位は、生前に就任した者は歴史上6人のみであり、通常は死後に任命される。そのため実際の最上位は従一位である。
	47084 文				従一位	
35398 文	9384 万	上級役人	4町	正二位		
31448.2 文				従二位		
貴族はこのほかに、位によって水田が与えられ、また私有地も持っていたので、総収入はまだ大きくなる。	23542 文	6149 万	1万6000㎡	正三位		
	19152.2 文			従三位		
	6079.2 文	1262 万		正四位上・下		
	5078 文			従四位上・下		
3274.6 文	712 万	1町	正五位上・下			
2466.7 文			従五位上・下			
現在の内閣総理大臣の年収は…約4060万円 国民の年収の中央値は…約407万円(2024年)	800 文	93 万	下級役人	8000㎡	正六位上・下	
	760 文			4000㎡	従六位上・下	
	600 文	81 万		2000㎡	正七位上・下	
	560 文			1000㎡	従七位上・下	
	400 文	74 万		500㎡	正八位上・下	
	360 文				従八位上・下	
	320 文	61 万			大初位上・下	
280 文		250㎡	小初位上・下	無位		

役人の収入 (官職の給料)	・太政大臣(6億5934万)	・左右大臣(6億5483万)	・内大臣(3億4176万)
	・大納言(2億6498万)	・中納言(2億6498万)	・三位参議(268万)
	※これ以降の官職については省略		
「藤原氏の主な官職」	・不比等(大納言、右大臣) ・武智麻呂(右大臣、左大臣) ・房前(太政大臣) ・宇合(参議) ・麻呂(参議) ・冬嗣(左大臣) ・良房(太政大臣) ・基経(太政大臣) ・忠平(太政大臣) ・兼家(太政大臣) ・道長(太政大臣) ・頼通(太政大臣)		

本時の展開で取り入れたジグソー活動について

1. 学習課題の設定

一人では解決できないような学習課題を設定する。今回の事例では、「資料A：藤原氏と天皇家との血縁関係」「資料B：他氏の排斥と藤原氏の摂政と関白の就任の流れ」「資料C：藤原氏の収入と荘園」の3つに分けられるような学習課題を設定した。

「一人では十分な答えが出ない」本時の課題に対して、一人一人がまず自力で考えてみる。



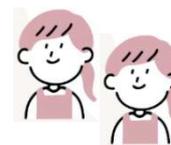
答えの出ない問い

2. エキスパート活動

資料A、資料B、資料Cのエキスパート資料を持つ3つのグループに分かれ、それぞれを3人または4人のグループに分けた。エキスパート資料は、視覚的に分かりやすく、読みやすい資料にした。

【エキスパート活動】

Aグループ

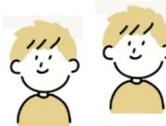


答えの出ない問い

Bグループ



Cグループ



グループでの話し合いでは、自分の考えをもった上で活動させることが大切であるため、エキスパート活動の際には、まずは一人で資料を読み取る時間を設定した。その後、同じ資料を読み合っている他者の意見との共通点や相違点に気付かせながら、担当する資料についての理解を深め、自分の考えに自信をもってジグソー活動に臨めるように配慮した。

今回の事例では、

「資料Aは小学校の学習を基にした内容」

「資料Bは歴史学習に必要なスキルである年表から流れをつかむ内容」

「資料Cは読みやすく分かりやすい図から判断する内容」の3つの資料を用意した。資料Aは小学校の既習事項であるため比較的理解しやすい内容である。資料Bは平安時代中期から後期の流れが詳細に記載されているため、共通点や起きたことの全体像をつかむことが難しい内容である。資料Cは図から判断するだけの資料であるため歴史学習の習熟度が低くても読み取ることができる内容である。このように、生徒一人一人の習熟度や理解度には差があることも考慮したエキスパート資料を作成することで、全ての生徒が主体的に課題を解決しようとすることができると考えた。

3. ジグソー活動

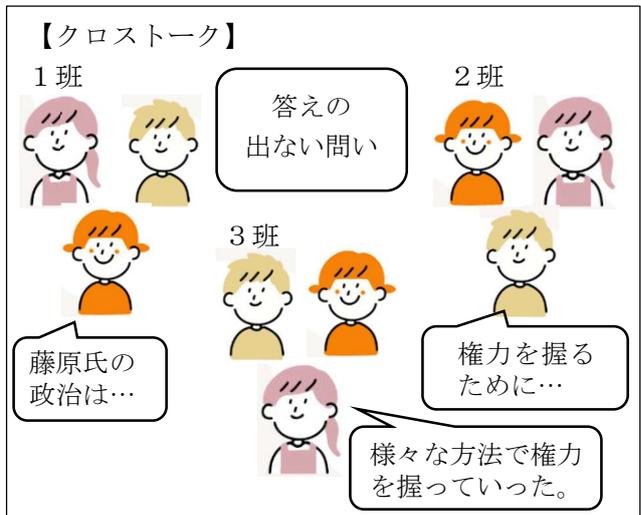
資料A、資料B、資料Cのエキスパート班から1名ずつ（2名になるグループもある）を配置した新しいグループを編成する。その際、全てのグループの活動が成立するように、習熟度を考えたグループ構成を教師が行う。

新しいグループに座席を変更することができたら、順番にエキスパート資料を説明していくが、教師が各グループを回り説明が滞っている生徒に対して支援を行う。全ての生徒が発表を終えた後は、学習課題に対するグループごとの解を考える。その際、全ての資料を取り入れた解を考えるように指示を出していく。

4. クロストーク

グループごとに考えた本時の課題に対する解を全体に発表する。自分のグループと他のグループとの共通点や相違点を参考にすることで、色々な考えを統合することができ、自分なりに学習課題の解を見つけることができる。今回の事例では、共同編集ソフト（スクールタクト等）を活用して全てのグループの考えを共有することで、多様な意見を取り入れながらまとめ活動を行えるようにした。

全体発表の際、グループで出た考えの違いなどについて、クラス全体で考えの根拠について議論する活動（クロストーク）を取り入れる。教師がファシリテーターとなって、円滑に議論が進むようにすることで、生徒の疑問点を解消したり、理解度を高めたりすることにつながる。授業の進度によっては、クロストークを積極的に取り入れることで、主体的・対話的で深い学びの実現が可能になると考えられる。



(2) 実践に当たっての留意点

古代までの日本の歴史学習は、中学校の歴史学習の初めの単元にあたり、ここでの学習が3年間の歴史学習の基礎となるといっても過言ではない。しかし、初めの単元ということもあり歴史上の偉人の実績や出来事について理解させようとしてしまい、講義型の授業になってしまうことが少なくない。

そのような状況を解消するための方策として、本事例では「小学校の学びシート」をICTで作成し、いつでも必要な知識を得ることができるようにした。そして、「小学校の学びシート」と中学校の教科書を比較して相違点や共通点を探したり、関連性を見つけ出したりする活動を単元の導入で取り入れることで、小中の接続を円滑にしていくとともに、歴史的な見方・考え方を働かせていく工夫を行った。

また、小学校での学習を基に学習課題を設定することで、自らの学習を調整したり、課題に対して主体的に解決しようとする態度が養われたりしていくようにしていく。その際、単元全体で古代までの日本の特徴をつかむことが必要となるため、講義型になることがないように、意図的、計画的に活動型の授業を取り入れていくことが必要である。

そして、小单元ごとに「学習シート」を作成することで自らの学習状況に気付かせるとともに、どのような考えの変化があったのかに気付かせることで、次の小单元に向けた学習意欲をかきたてるようにしていく。

・生徒の学習シートの例

第2章 古代までの日本 3節 古代国家の歩みと東アジア世界

単元課題 国家はどのようにして起こり発展していったのだろうか

小単元課題 古代の日本はどのような特徴をもった国になっていったのか

古代の日本は、中国にならった国づくりを積極的にすすめました。

(例) 飛鳥時代：冠位十二階、十七条の憲法、法隆寺、遣隋使

奈良時代：平城京、遣唐使、律令制度（土地制度、税制度）、東大寺

平安時代：天台宗、真言宗、摂関政治、浄土信仰、平等院鳳凰堂

注意点

- ・Classroomの期限にしたがって提出すること。
- ・教科書、資料集、ノート(プリント)を使用
- ・インターネットの場合は出展に注意する
- ・文章の量で評価はしないが、少ない文章ですべてを説明することは難しいので、できるだけ多く文章を書くこと。
- ・評価については、返却する際のコメント欄に入力します。(知技→思判表の順)

1 毎回の授業を振り返ってみよう！（まとめと振り返り） **知識・技能**

各授業 (主な内容)	授業のまとめ ※文字の大きさを変えずに3行以上入力すること。	小単元課題を解決 するための キーワード	自己評価 (A,B,C)
① (聖徳太子)	聖徳太子は十七条の憲法などによって、天皇中心の政治を行おうとした。そして、遣隋使を派遣した。また、仏教を重んじるなどして、中国にならった国づくりを行い、日本が発展するようになった。	・十七条の憲法 ・冠位十二階 ・仏教・儒教	A
② (大化の改新)	中大兄皇子と中臣鎌足は、大化の改新で天皇中心の国づくりを行い、日本が唐や新羅に負けない強国となるようにした。その結果、天皇の存在は神に近いものとなった。	・大化の改新 ・白村江の戦い ・唐、新羅、百済、日本	A
③ (律令国家)	五畿七道ができ、交通制度や地方が整備されたり、律令国家として必要な役職を設けたりすることで、天皇を頂点とする中央に権力を集中させた国家が日本に生まれた。租調庸などの税負担によって国は成り立っていたが、墾田永年私財法などによって公地・公民の原則は崩れ始めた。	・平城京、平城宮 ・二官八省 ・五畿七道	A
④ (飛鳥と奈良の文化)	飛鳥文化では、主に朝鮮半島の影響を大きく受け、政治にも仏教が取り入れられた。一方、奈良時代には天平文化が聖武天皇の頃に始まり、災害や伝染病、争いなどから国を守るために大仏をつくった。西アジアやヨーロッパからもガラス製品や楽器などが伝わり、日本独自の特徴として、古事記や日本書紀、風土記や万葉集がつくられたことがあげられる。飛鳥と奈良の文化の違いは、飛鳥文化にはなかった日本独自の文化が奈良時代につくられたことである。	・仏教文化 ・聖徳太子 ・聖武天皇 ・東大寺、正倉院宝物 ・古事記、日本書紀、風土記、万葉集 ・園分寺、園分尼寺	A
⑤ (桓武天皇)	桓武天皇は、乱れた律令政治を立て直すために都を平安京に移し、長年朝廷に従わなかった蝦夷を討伐することでアピールを行った。また、勸解由氏を設置し、国司が税を管理する際に税を自分のものにしてしまわないようにした。	・平安京 ・征夷大将軍 ・勸解由使	A
⑥ (藤原氏の政治)	藤原氏は朝廷の中での権力を高め、天皇家に近づくことで絶大な権力を握ることができた。まず、藤原氏は、自分の娘を天皇の妃にし、それで生まれた子どもを次の天皇にすることで血のつながった天皇をつくり、天皇家との関係を深めた。次に、その天皇が幼いときには摂政として、成人したあとは関白として天皇の政治を補佐し、天皇の側近となった。また、中心人物を倒していき、藤原氏に邪魔な人たちがいなくなるようにした。さらに、朝廷の中でも高い位につき、収入をたくさん得た。これらのことから藤原氏は絶大な権力を握ることができたといえる。	・摂関政治 ・外祖父 ・中心人物を倒す	A
⑦ (国風文化)	国風文化の特徴は、日本の風土や生活、感情に合った文化である。漢字を变形させてつくった仮名文字を使って様々な文学作品がつくられ、服装や住宅も独自のものになった。また、社会の変化から、浄土信仰が広まった。ただし、国風文化は日本の文化だけを取り入れたものではなく、中国の文化と日本の文化の両方を大切に、好みの形に混ぜ合わせていったものだった。	・国風文化 ・仮名文字 ・浄土信仰 ・文学作品	A

2 小単元課題に対する答えを考えよう！ **思考・判断・表現等**

※各授業(上の表)で学習したことをもとに下の欄に自分なりの解説を考える。

日本は、遣隋使や遣唐使を派遣し、文明が発達していた中国にならって法律や都をつくり、国づくりを行った。その結果、日本は律令国家が成立し天皇を頂点とする中央に権力を集中させた国家になった。また、漢字や儒学、仏教などが日本に伝わり、飛鳥文化や天平文化も栄えた。平安京がつくられると摂関政治が行われ、浄土信仰が広まり、今まであった中国の文化と日本の文化の両方を大切に、混ぜ合わせていく国風文化も生まれた。ここから、中国にならった国づくりの理由は、文明が発達していた中国にならうことで日本を発展させるため、特徴は法律や都が中国にならっているため、人々の生活も中国にならったものだったことだといえる。